

発 明 文 化 論

〈第 91 回〉

丸山 亮

ナバホ族とアメリカ

砂漠の中に巨大な岩がそそり立つアメリカ西部の景勝の地、モニュメントバレーを訪れた。「駅馬車」など、ジョン・フォードの西部劇や、最近ではテレビのCMの舞台にもなっている。大自然の懷に抱かれて日没や日の出に立ち会うと、何か神秘的な思いにとられる。ここは古くからナバホ族が住み、彼らにとっての聖地だ。ナバホ族は先住民の中で最も人口が多いとされる。アメリカ政府が保護する居留地で、外部の人間が立ち入るには、入域料を納めなくてはならない。

5月の初め、ラスベガスを発着するツアーの一員となり、この地に入った。自動車道が尽きる峠で車を乗り換え、ナバホ族の男が運転とガイドを務める車で、細い道を谷底に向かって降りて行く。陽気で話や歌が巧みなガイドだ。名前はバークリーという。英語化した名前、話す英語にはなまりがない。彼の話に聞き入った。道路わきの灌木をさして、これはジェニファーといい、薬効があるなどと教えてくれる。その木のナバホ名も教わったが、発音が難しくて真似るのが容易でない。

祖父は医師を兼ねた祈祷師で、かつては病気になった人が治療を求めて多く訪ねて来たという。その祖父には子供のころ、日の出とともに光を浴びてひたすら走ることを求められた。太陽の気を受けることが健康につながるという考えだ。また、飲酒は体に良くないと厳禁されたため、近くのビール工場に勤めていた頃も含め、口にすることがないという。

巨岩の一つ一つに精霊や神の存在を感じるらしく、それが身近なものとなっている。もっとも彼自身は伝統的な宗教観に立つが、妻はキリスト教徒で、今日ナバホ族の半数ぐらいはキリスト教徒だといわれる。

バークリーはガイドになる前、サンディエゴなどで建設の現場にもいたらしい。つまり白人社会の中で生活した経験がある。しかし彼は先祖伝来の慣習を受け継ぎ、それを次代に引き渡すことを使命としている。踊りの名手でもあり、ナバホ族の儀式や観光の場のほか、他の部族との交流にも積極的に参加して、披露するという。

この夜、巨大な岩陰のベンチに腰を下ろし、満月の明かりでナバホの伝統料理を味わった後、踊りを観る機会があった。その一つ、戦闘に発つ前の戦士を鼓舞する踊りでは、伝来の羽飾りに自ら手を加えたものを身にまとい、笛や太鼓の響きに合わせて激しく踊る。部族間の戦いがしばしば起こった時代の記憶を引き継ぐが、不戦の時代となった今では、剣を鳥の羽に代えた飾りを使うという。バークリーは双子の姉妹を含む4人の子持ちで、子供たちにはそうした伝統芸能を熱心に教えている。彼らが通う学校では英語の授業が主体だが、ナバホ語の授業もあるようだ。

宿はホーガンという彼らの伝統的な家屋に泊まった。母親が中心となる女性の家で、丸屋根の下の空間は子宮をイメージし、円形の周囲に配した10本の木の柱は、妊娠期間に対応しているという。彼らの宇宙観と象徴体系の一端を見る思いがした。

ナバホには自治体の首長を選ぶ選挙のほか、アメリカ大統領選などの機会も保証されている。長老たちは概して保守的で、先祖伝来の地が観光開発で俗化していくのを好まないが、バークリー自身は、最近、ある程度の開発を必要と認めるようになったという。西欧文明のただなかにあって、伝統的な価値をどう引き継ぐか。明治の開化に直面して、夏目漱石ら知識人はその悩みを語ったが、いまアメリカのナバホ族が同じ悩みの中で、必死にその道を模索している。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)